



平成 16 年度「児童・生徒の平和メッセージ展実施報告書より」

絵画最優秀賞 小学校の部 「平和を祈る」 佐敷町立馬天小学校 6 年 上原早起

2-2-5 米軍基地と平和教育

(1) 復帰前

戦後沖縄に置かれた米軍基地は、教育にもいろいろな面で影響を与えた。米軍基地があるがゆえの米軍人による事件・事故も起き、児童生徒が被害を受けた例も少なくない。沖縄戦が体験者からの語り継ぎや映写、遺跡訪問など、過去に起こったことを風化させずに継承していこうという教育であるのに比較して、米軍基地は現在進行形の平和教育で、大人にも子どもにも「平和」と「戦争」、「国家」と「世界」ということを考えさせる。

復帰前の「米軍基地」をテーマにした平和教育の教材は、地域や社会の動きそのものであった。基地を起因とする事件や事故に対し、県民が米軍に抗議運動を展開する中で、自然に子どもたちにも、基地を起因とする社会問題、そして「米軍統治からくる不公平さ」、「平和」、「人権」に目が向いていった。1955年におきた「由美子ちゃん」事件は、石川市で拉致された6歳の少女が米兵に暴行されて殺害された事件である。この事件の以前にも米軍人による犯罪や事故は起こっていたが、「由美子ちゃん事件」は、土地収収をめぐる反米軍の激しい運動が起こっていた時期であったことから、激しい抗議運動が繰り返された。

沖縄子どもを守る会が抗議声明を発表、中部の基地のある町で「由美子ちゃん事件と子どもを守る大

会」が開催され、立法院でも抗議決議等が採択された。犯人の米軍人（軍曹）は、軍事裁判で死刑判決を受けたが、その後本国送還となり、結果はうやむやとなった¹¹⁸。

児童生徒が犠牲となった米軍基地を起因とする事件事故で最も大きいのは、1959年の石川市の宮森小学校で起きた米軍戦闘機の墜落事故である。死亡者17人のうち児童が11人、負傷者210人のうち児童が156人と、いたいけな児童が多数犠牲になり、多くの人々が胸を痛め、あらためて米軍への怒りを増した。

当時としては、世界の航空史上でも稀な大惨事として、国内外に報道された。行政や民間機関も米軍へ抗議し、速やかな賠償を求めて動いたが、教育の場でもこの動きは早かった。沖縄教職員会、PTA連合会、沖縄子どもを守る会などが「石川ジェット機事件対策会議」を設置し、米軍に救援と事故防止策を強く要求。教職員会では20万人の児童生徒から3セント、教職員会からは30セントずつの見舞金を集めて、負傷した学童の治療に当たらせるなどの救援活動を展開した。

1960年の「沖縄教育¹¹⁹」は、宮森小学校の中嶺盛文校長と、同校児童の文を紹介している。

沖縄教育史上の最大の惨事 ジェット機事故に思う 仲嶺盛文

戦争も知らない子どもたちに戦争以上の苦しみをさせ、しかも11人の子どもたちをなくし、156人の子どもたちが負傷したということは、学校の責任者として誠にしのびがたいことでもあります。事故の起きた当時は茫然自失なすことを知らなかったのですが、皆様の心からなる励ましにより、やっと立ち直ることができました。よくも気が狂わないでこれまで過ごしてきたことを不思議に思うほどであります。

3年 たまなは ひろみ

あのZ事件からもう53日すぎたが今でもやけどで苦しんでいるお友達がたくさんいます。それでもZ機はかまわず毎日のように飛ぶので皆こわがっています。

うちのつよしは3つですが、あそんでいるとき、飛行機の音がすると、びっくりして「おばあちゃん、Z機ついらくまたね」と、おばあちゃんをつかまえてびくびくします。

この間も学校につれていったら、だいくさんがろうかひるねをしているのを見てつよしびくびくしたように「人がしんでいるあっちにもこっちもいっぱいしんでいる」といったのでこまってしまいました。こんなにみんなびくびくしているのにアメリカはただばいしょう金をあげればいいんだと思ってひこうきをとばすので、わたしはこんなへいたい世界一きらいです。石川の空からそして、沖縄の空からひこうきをとばさないやくそくをしたいのです。

6年 島袋礼子

6月30日は、私たちの学校にZ機が落ちました。(中略) 2年生の妹のえみ子の教室はぼーぼーと、こげ茶色になってもえていました。私はえみこにけがはないかとしんぱいで、

¹¹⁸ 沖縄タイムス社 (1970)

¹¹⁹ 沖縄教職員会編 (1960)

一時、燃えている教室のところにちかよってえみ子をさがしました。えみ子がいなかった
のでこんどは、ようちえんの弟しげおのところにいきました。

しげおは「母ちゃん、母ちゃん」となきながらあるいていました。私はすぐ弟をおぶっ
て家に帰りました。(中略)

Z機が落ちたときからわざとのように、よけいに飛行機がとんでいます。

これからはえんしゅうの飛行機などを島の上から飛ばさないよう、アメリカのえらいひ
とたちにみんなでお願いしましょう。

このような事件、事故の頻発は当時、大きな政治、社会問題であった。子どもたちは、教材として提示されるまでもなく、日々の生活の中で基地があることで派生する危険や重圧を肌で感じていた。上記に掲載した事件や事故の身近な当事者ではなくても、新聞やそのほかの報道、大人の話から、当時の政治・社会情勢を敏感に感じ取っていた。

その後も基地に起因する事件や事故は多発した。1964年の米軍人による犯罪は発生総数が973件、このうち強盗、婦女暴行、障害などの凶悪・粗暴犯が52.8%を占めているという。ちなみに1961年度984件、62年度1078件、63年度973件である。

(2) 復帰後

沖縄からは、「安保が見える」とよく言われる。サンフランシスコ平和条約と同時に締結された日米安全保障条約は、2度の改定を経て現在に至っている。同条約に基づき日本に米軍基地が置かれているが、復帰後30年以上を経過した現在でも、その在日米専用施設の約75%が沖縄にある。「基地の中に沖縄がある」とさえ言われる米軍基地の存在は、沖縄の政治、経済、社会などいろいろな面に影響を与えてきた。

基地が存在することで発生する騒音や環境被害、事件事故の多発など、米軍基地に起因する問題は、復帰前も復帰後も沖縄で大きな政治・社会問題であった。

復帰後は、沖縄にも日米地位協定¹²⁰が適用され、米軍人・軍属による事件・事故について日本の司法が幾分及ぶようになり、若干透明性は増したが、罪を犯した米軍人等の身柄引き渡しや事件事故の捜査権をめぐる問題など、県民の間に不満は大きい。基地に起因する事件、事故は今でも発生しており、日米安保のはざままで沖縄が大きな負担を強いられている現状は変わりが無い。沖縄県や県民の多くが米軍基地の整理縮小と不平等な地位協定の改定を求め続けているが、依然未解決なものが多く、県民全体、県政の課題でもあり続けている。

平和教育で沖縄の基地問題を取り上げるときは、このような基地の現状、なぜ沖縄にこれだけの基地があるのか、基地被害、加重負担などが大きなテーマになっている。

日教組第46次教育研究全国集会(1997年)で発表された、事例の中から嘉手納基地を社会科教材として取り上げた指導案を抜粋して紹介する。

¹²⁰ 米軍による日本における施設・区域の使用と米軍の地位について規定したもの

・ テーマ設定理由

嘉手納町は面積の83%が米国の軍事基地である。県内の市町村の中でもその割合は最も高く、町民は残りの17%の狭い地域にひしめき合って生活を営んでいる。その上、目の前の嘉手納飛行場からの航空機騒音は、町民生活に影響を与え、また、軍事基地があるがゆえの事故等、常に危険と背中合わせの生活を強いられている。

しかし、その中で生まれ育った子どもたちにとって、それはちっとも特別なことではない。騒音のある生活は彼らの日常であり、フェンスは常に目の前にあるもので疑問に思う余地もない。基地の中のカーニバルを楽しみ、フェンスの向こうの異文化に興味を持つ。無理のないことである。

だがしかし、子どもたちに知ってほしいと思う。この状況は、決して普通の状態ではないということを。健康な生活を営むためには軍事基地はないほうがいい。

嘉手納に住む子どもたちに、基地のある自分たちの町をしっかりと見つめ、そしてこれからの嘉手納のこと、自分たちの未来について考えるきっかけになってほしいと思い、このテーマを設定した。

・ 教材について

ある程度まとまった授業をするには5年生がいいように思う。5年生では公害についての学習がある。そこで地域の公害として基地を取り上げたい。そして、基地公害に入る前に嘉手納町の実態としての“基地”を学習する。嘉手納基地を学習することによってそこに住んでいた人の思いや、町民としての誇りなどにも気づいてくれればと思う。

・ 子どもたちの実態（アンケートより）

学習に入る前に、子どもたちが基地をどのように認識しているか知るためにアンケートを取ってみた。（5年生78人中73人回収）

子どもたちの93%が基地内に入ったことがあり、そのほとんどがカーニバルの時である。地域の祭りとは趣が違らしく、楽しかった思い出があるので“嘉手納基地”と聞くと、カーニバルを思い浮かべる子が20%ほどいる。そして入ってみて、その土地の広さに驚いている。嘉手納基地がある訳は、戦争に負けたからで、戦後、基地ができたということ、それから50年もたっていることを70%の子が知っている。

しかし、基地ができる前の嘉手納がどんな様子だったのかに思いを寄せる子は少ない。嘉手納基地については、爆音がうるさい、土地が狭くなった、基地があって良いことはないなど、思っていた以上に否定的で、基地公害についても基本的なことは認識している。

爆音については、“なれちゃってうるさいとは思わない”という子がこれまで多かったが、

今回のアンケートでは、“爆音がうるさい”と答えている子が70%近くいる。

学習指導案

1. ねらい：現在と戦争前の嘉手納基地の様子を調べることによって、町の歴史を知り、基地に取られた土地は、自分たちの祖父母が、生活していた場所だということを感じさせる。

2. 学習計画（5時間）

時	ねらい	学 習 活 動
1時間	嘉手納基地の広さを知る	・新聞記事などから嘉手納が、よくニュースになっていることに気づく ・嘉手納基地の占める割合を知る。
2時間	基地の広さを実感する (基地めぐり)	・バスで嘉手納基地を回って、色々なものがあることに気づく ・フェンスで囲まれていることに気づく ・ゲートの数はいくつあるだろう ・どんな建物があるだろう
3時間	基地の中の様子を知る	・基地の中の施設・設備を調べる ・基地の中がリトルアメリカであることを知る
4時間	昔の嘉手納の様子を知る	・祖父母の出身地を確認する ・昔の写真や地図を見て、気づいたことを話し合う。 ・伊波さんの話を聞く ・基地に取られた土地を確認する
5時間	基地のない嘉手納について考える	・フェンスの中に入れないのはなぜか考える。 ・基地がなかったらどんな町になっていたか考える

3. 子どもたちの感想

(1時間目 広さの学習を終えて)

- ・私は、グラフを見て嘉手納基地は大きいなと、がっかりした。
- ・米軍基地は広すぎる。嘉手納は狭くなる。嘉手納は人でぎゅうぎゅうになって出ていく人が多くなったら、嘉手納町が嘉手納村になるのかな。
- ・どうして嘉手納だけ多くとられているのかな
- ・嘉手納の人は狭い土地に14万人も住んでいるのに、基地に住んでいる米国人は広い土地に2万人しか住んでいない。嘉手納に少し分けてほしい。

(2時間目 基地めぐりを終えて)

- ・基地はやっぱり大きかった。ゲートが5個もあった。
- ・基地の中はとても広かったです。よく見ると、使われていないところがいっぱいありました。そこにも家やマンションを建てればいいのと思いました。

- ・軍はとても広がった。軍がなかったら今頃大きいデパートなどがあっただろうと考えました。
(3時間目 基地の様子を見て)
- ・基地の中にいる人たちは、日本の平均3倍の広さに住んでいるから庭もあっていいと思うけど、いやなときもある。
- ・基地がなかったら沖縄市まですぐいけるんだなあ。
- ・基地では日本の法律が通らない。
- ・外人の庭は広がった。
- ・嘉手納基地の滑走路は那覇空港の滑走路よりも長いことが初めてわかった。
(4時間目 昔の嘉手納を勉強して)
- ・昔の嘉手納は広がったのに、今は小さい嘉手納になっている。
- ・おじいちゃんの生まれたところは、もう全部基地に取られている。
- ・軍にいっぱい土地を取られている。戦争で負けたからといって勝手に人の土地を取らないでほしいです。
(5時間目 基地のない嘉手納を考えて)
- ・基地がなくなったら、遊園地や、家やホテルをたてたいです。どうしてかというと嘉手納の近くには遊園地や家やホテルがないからです。そして土地を取られた人に土地を返してあげたいです。
- ・ゲームセンターやただで遊んだりするお店や公園をいっぱい作る。そして基地が返されたら、基地祭りをして大喜びする。

沖縄が背負っている矛盾を子どもたちは自分たちの目を通して学んでいるようである。基地と隣り合わせに暮らしている子どもたちが、米軍基地とは何か、なぜその基地が自分達の町にあるのか、また、昔の町との比較をする中で自分達の町についてその特徴や歴史を学んでいる。

その過程を通して、騒音など種々の基地から派生することについて、いつも起こっている当たり前のこととして受け止めるのではなく、問題や不公平な事象があることを学び、どう対処すれば良いかを考えている過程がうかがえる。

2-3 平和発信拠点としての沖縄—行政や民間団体の取り組み

2-3-1 沖縄県の平和事業

「平和行政」という耳慣れない施策項目が沖縄県の行政分掌の中に現れたのは、1993年である。平和行政の推進課が、県に設置された。その目的は「県民の平和を願うところを広く国内外に発信し、恒久平和の創造に貢献するため¹²¹⁾」である。主な業務は、平和祈念資料館および平和の礎(いしじ)に関すること、戦後処理問題などを担当し、予算総額はここ数年約3億円～3億3千万円程度。現在の稲嶺県

¹²¹⁾ 「沖縄県知事公室平和推進課平成15年版 業務概要 = 平和の創造と発信」

政になって若干、県政重要事項の中での比重は変わったが、平和行政は沖縄県政のユニークな施策である。

沖縄県の平和行政には3つの重要な行政施策がある。沖縄戦の戦没者一人一人の氏名を刻んだ記念碑「平和の礎」、沖縄戦の歴史的教訓を正しく次代に伝え、沖縄の視座から恒久平和の樹立に寄与していくために建設された「沖縄県平和祈念資料館」、そして、沖縄と地理的・歴史に関わりの深いアジア太平洋地域の平和の構築・維持に貢献した個人・団体を顕彰する「沖縄平和賞」の3事業である。以下で、県政のこの3事業について紹介する。

(1) 平和の礎

沖縄戦の激戦地であった糸満市摩文仁。平和祈念資料館や平和祈念堂など沖縄戦戦没者の慰霊の施設が並ぶ沖縄戦跡公園の西南端に位置するのが平和の礎である。23万8千人あまりの犠牲者の名前が刻まれた板状の石碑が平和の炎を取り囲み放射線状に立ち並ぶ。敷地面積1万7千900平方kmの敷地面積に刻銘碑が116基、総延長は2,200mになる。全事業費21億円あまりをかけて建設された。夏には石碑の間に植えられた約300本の木が木陰を作り、訪れる人を癒してくれる。

平和の礎は、太平洋戦争・沖縄戦終結50周年を記念して1995年に完成した。沖縄の歴史と風土の中で培われた「平和のこころ」を広く内外に伝え、世界の恒久平和を願って建設されたものである。国籍を問わず、また、軍人か非軍人かの別なく、沖縄戦で亡くなったすべての人々の氏名を刻んで永久に残すのが目的である。

基本理念は、戦没者の追悼と平和祈念、戦争体験の教訓の継承、やすらぎと学びの場の三点。戦争記念碑は世界中にあるが、軍人・非軍人を問わず、また、国籍も関係なくすべての人々を同等に、犠牲者として刻銘した戦争記念碑はめずらしく、国内外からそのコンセプトについては共感を得ている。通常戦争記念碑は、他国との戦争で戦った自国の兵士の勇姿を賞賛する目的で建設されるのであるが、平和の礎が、なぜこのような幅広い意味での平和希求と人類愛をうたったのか。

平和の礎の建設を県政事業とした前知事の大田昌秀（現在・参議院議員）は次のように語っている。

「戦争に出まして、戦場でみたいろいろな様相というのは、どのような口実を設けても人間どうしが殺戮しあうということは大変なことだということを実感いたしました。戦場の実際の姿というのは、敵といわれていた米国兵が我々の兄弟などの命を救ったり、味方として頼りにしていた守備軍の将兵が、我々の親兄弟を殺戮するというような場面も実際にあったわけですね。二度とこういうことがないようにするためには、私の考えでは、敵として戦った人々、つまり戦争に勝った人々もやはり戦後になって非常に心に深い傷を負っていると思うんです。（中略）二度と戦争を繰り返さないためには、敵、味方もなく、皆がその誓いを新たにして、このような、人間が人間をころしあうということはやめる。そのためにも、死者たちのおかげでそういう考え方も出てきているわけですから、その死者をとむらうことは非常に大事だと、そこには敵・味方もないという気持ちで、かつての敵であった米国兵の戦死者たちの名前も一緒に、沖縄の戦死した人たち、それからもちろん県外からいらした方々の戦死者の名前も一緒に『平和の礎』に刻んだわけでございます¹²²⁾」。

¹²²⁾ ニライ社（1995） p. 21～22



2000年G8サミットでは、米国のクリントン大統領が礎を訪問した。(沖縄タイムス社提供)

戦場で大田がみた沖縄戦は、多くの県民が体験したものと同じであった。敵を憎むのではなく、勝った者も深い傷を負い、戦争の犠牲となったのだから、敵、味方なくとむらうことが非戦の誓いとなるという考えに基づくものであった。

沖縄戦の犠牲者の中には、どこで亡くなったのかいまだわからない人たちも多い。また、戦闘員として戦場に狩り出された人々や、軍人の中でも遺骨などが遺族に残らなかった人々も少なくない。この礎で親族、遺族が故人の名前を見つけて、手を合わせる姿は現在でも絶えない。また、米国人の訪問者が、戦友の名前を見つけて、涙する姿もよく見受けられる。

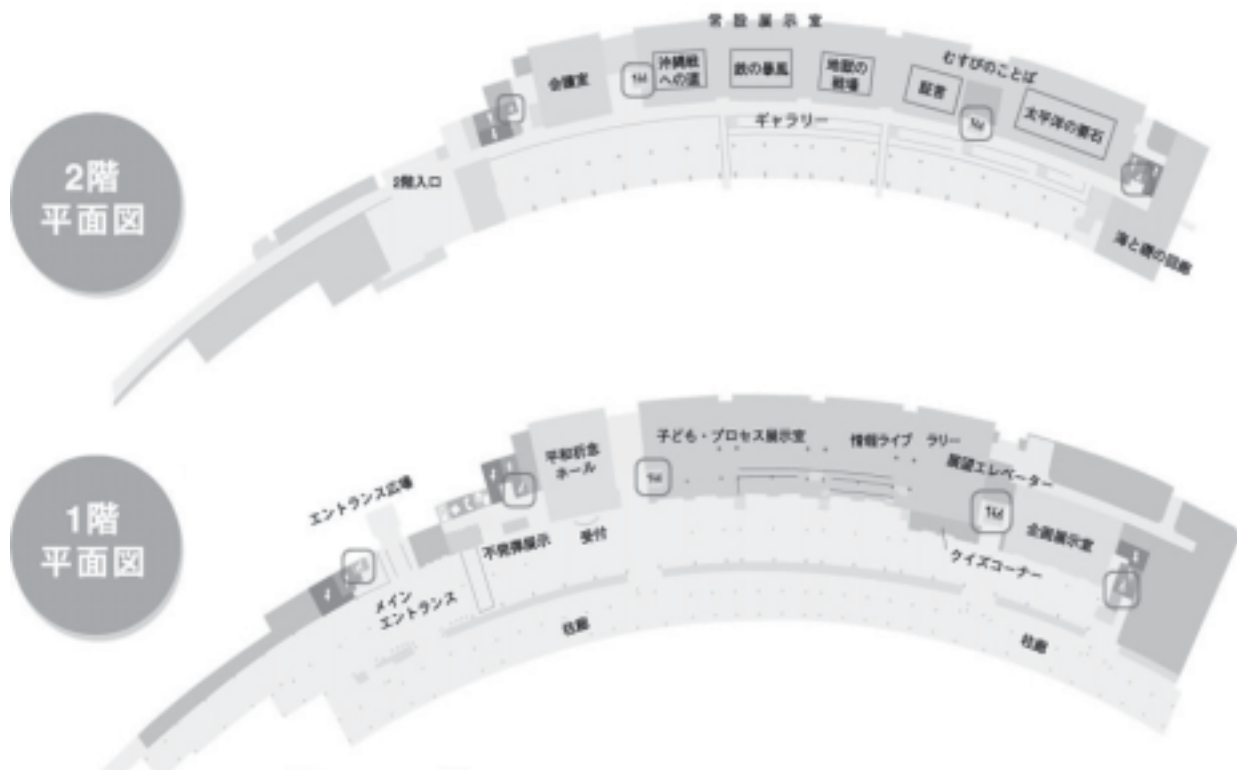
(2) 平和祈念資料館

1975年に設立された沖縄県平和祈念資料館を移転して、2000年に開館したのが現在の沖縄県平和祈念資料館である。敷地面積1万2千㎡、延面積1万179㎡で地下一階、地上二階建ての、赤瓦が軒を連ねるような構造の建物である。旧館が延床面積1,003㎡であったのに比較すると床面積で、10倍の広さで、新館は旧館の設立理念を引き継ぎ、平和の創造と人類の恒久平和に寄与する施設として、移転改築した。旧館よりはるかに規模、展示物数、展示コンセプトの拡大・強化が図られている。総工費は49億円をかけている。

平和祈念資料館の役割について同館では、全戦没者への追悼と恒久平和の祈念、平和の発信と創造、平和教育、平和交流および人材育成、平和ネットワークの構築、平和のデータベースと調査研究、の五点を掲げている。

館のメインとなる常設展示室が1から5まであり、その他企画展示室、子ども・プロセス展示室、情報ライブラリー、平和祈念ホールなどがある。常設展は、一階と二階の二つのゾーンで構成され、二階の「歴史を体験するゾーン」は観覧型で、来館者が、歴史的体験を通して平和の尊さや戦争の悲惨さを知り、この教訓を、次の世代へと継承していくねらいがあり、次の五つの展示室から構成されている。

図2-2 沖縄県平和祈念資料館 館内レイアウト



出所：沖縄県平和祈念資料館（2005）

第一展示室 「沖縄戦への道」：

沖縄が日本の国家体制に組み込まれていく過程を、琉球処分から、アジア・太平洋戦争末期の沖縄戦前夜までを、映像やパネルで解説している。

第二展示室 「住民の見た沖縄戦 鉄の暴風」：

約3ヶ月に及んだ地上戦の経緯と、住民犠牲の諸相について、映像と造形物で展示している。破壊し尽くされ、瓦礫と化した街の様子を原寸で再現した、造形物が沖縄戦のすさまじさを語る。

第三展示室 「住民の見た沖縄戦 地獄の戦場」：

空間全体を戦場とイメージして作られ、軍民入り乱れた戦場での住民犠牲の出来事を、写真パネル等や、焼け焦げた衣装などの実物で展示している。また、住民や日本兵に避難場所として利用されたガマ（自然壕）と、その中で起こった出来事が、造形物で再現されている。

第四展示室 「住民の見た沖縄戦 証言」：

犠牲を強いられた一般住民の証言を、文字と映像で紹介している。

第五展示室 「太平洋の要石」：

終戦後の収容所生活から、27年間の米軍統治を経て、1972年に沖縄が復帰するまでの住民の様子や、政治状況を、実物資料、写真パネル、造形物、映像などで展示している。米軍の沖縄当地の状況や、土地闘争、復帰運動、「太平洋の要石」と呼ばれて、今日まで続く「基地の島」沖縄の実態を展示している。

二階の参加型展示室である、「未来を展望するゾーン」は、活用型で、展示は主に児童・生徒を対象にしている。子どもプロセス展示室は、子どもたちが積極的に平和を愛する心を育むためのもので、世界の国の子どもたちの生活の様子を紹介している。戦争、環境、人権問題など世界中で起きていることを取り上げ、その原因・解決方法等を考えてもらうのが趣旨である。

その他、平和や沖縄戦に関する一般図書、児童図書など約1万2千冊、平和学習のためのビデオなどが収蔵され、平和学習支援を行っている。

旧館時代の観覧者は、最後の年度の1999年度に17万あまりだったが、新館になってからは30万人から40万人で推移している。特別企画展を随時開催するほか、展示パネルや証言ビデオの貸し出しなどを行い、平和学習の支援をしている。

(3) 沖縄平和賞

従来、沖縄から問う平和は、沖縄戦、軍事基地問題を大きなテーマとしてきた。「平和賞」は、平和の概念を広く捉え、戦争や地域紛争の抑止、貧困・難民・環境問題など人類の平和・生存を脅かす問題に取り組み、その解決のためにアジア・太平洋を中心に活躍している国内外の団体や個人を表彰する事業である。

1999年に創設され、2001年に基本構想が策定された。2年に一度受賞者が決められ、これまでに2団体に対し、正賞の他、副賞として1000万円がそれぞれ贈られた。2002年の第1回が、アフガニスタンで医療活動などを通じて平和と人間の安全保障に貢献している「中村哲を支援するペシャワール会」に、第2回がアジア、アフリカなどで医療救援活動を続ける「AMDA」に贈られた。

ペシャワール会中村代表は、「私たちの活動を「非暴力による平和への貢献」として沖縄県民の皆様が認めて下さったことは特別に意味のある事だと受け止めております。遠いアフガニスタンでの活動と、アフガンに出撃する米軍基地を抱える沖縄、このコントラストは、現場にいる私たちには圧倒的であります。平和を唱えることさえ暴力的制裁を受ける、現地の状況の中で、その奪われた平和の声を、「基地の島・オキナワ」の人々が代弁するのは、現地に居る日本人として名誉であります」と、受賞挨拶で語っている。



第二回沖縄平和賞授賞式(2004年10月22日:名護市の万国津梁館)
で行われた授賞式でAMDAの菅沼理事長に折り鶴を贈る児童たち

A M D Aの菅波茂理事長は、「沖縄は日本で唯一の血縁共同体社会であるということ。すなわち、近い他人より遠い親戚を大切にする。世界で他人の支援を必要としている弱者の人たちの多くは、血縁共同体の社会です。こういった血縁共同体社会とどう付き合うか。そのことに関して、沖縄の人たちは、人間としてのルール、やってはいけないことを、日常生活で体得されています。私たちが沖縄の人に一番期待するのは、地理的なものよりも、血縁共同体社会でもう一度、世界を見直していくということです¹²³」と、歴史的に相互扶助の精神を持ち、現在もこれを実践している沖縄の人々の精神こそが、これからの国際貢献に必要とされていることだと、人々の関心を喚起した。

2-3-2 市町村の平和事業

(1) 自治体の非核宣言

自治体の非核宣言は、1980年代にイギリスのマンチェスター市で行われた。当時、東西冷戦下で、ヨーロッパの都市では、核兵器による攻撃が危惧され、核の配備は報復攻撃の危険性を増すだけである、との考え方から、住民を守るために自治体として、非核平和宣言をしようとの運動が広がった。

マンチェスター市は、1980年に自らを非核兵器地帯と宣言し、他の自治体にも同じような宣言をするよう求め、イギリス国内の多くの自治体が賛同した。その後、この宣言運動は、世界に広がり、日本でも、1980年代から非核宣言を行う自治体が増え続け、現在では8割以上の自治体がこの宣言を行っている。

沖縄では、1980年代のこのような動きに呼応した形で非核宣言が行われ、その後次第に増加し、現在では沖縄県をはじめ、県下の全市町村で非核宣言¹²⁴が行われている。沖縄で非核宣言が早かったのは、南風原町、大宜味村、読谷村、北中城村などでいずれも1982年である。沖縄戦の激戦地であったり、基地を抱えているといった理由で、核兵器廃絶に敏感な自治体が多い。

宣言文の内容は、下記に示した大宜味村も一例だが、世界中からの核廃絶の願いにもかかわらず、軍備拡張は続いていることなどに触れ、「人類初の被爆国民として、また悲惨な戦争を体験した沖縄県民として、総ての戦争を否定し人類の生存を脅かす核の廃絶を世界の全核保有国に求める」と、核の脅威をまず指摘している。さらに、「大宜味村に住むわたし達は、何よりも先ず自らが住むこの地域の平和を求めるものである。これは、平和を希求する我が大宜味村民として当然の要求であり、人類の生存を確実にするためにわたし達に課された使命でもある。よって、本議会は、生る権利を真に自らのものとするため、永久に平和を希求するとともに核を拒否し、核廃絶推進のため努力するものである」として、一自治体の大宜味村にとって平和をおびやかす核の廃絶がいかに重要かを述べている。

(2) ユニークな市町村の平和事業

1) 南風原町

南風原町は、那覇市の南側に位置する、人口3万3千人の町である。面積は10平方kmでかぼちゃなど野菜栽培が中心の農業町だが、昔からここで織られる琉球がすりは沖縄を代表する染織として知られ

¹²³ 沖縄県広報課 (2004) p. 8

¹²⁴ 沖縄県平和祈念資料館では、県および全市町村の非核宣言を掲載ホームページに掲載している。http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp/htmls/heiwa/hemenu.htm

ている。

この南風原町には、沖縄戦の守備隊であった第32軍（球部隊）の直属の陸軍病院が設置されており、当時の南風原国民学校が病棟として使われていた。守備軍司令部が、首里から南部への撤退の際に、重症患者を、ここに設置されていた病院壕に残し、あるいは青酸カリを飲ませて自決させるなど、悲劇の場所となった。

南風原町の平和行政は、1989年に設立された、町立の文化センターを中心に行われてきた。平和行政の基本は、町の歴史と伝統を、徹底的に町民の手で掘り起こし、町作りの指針を探り出していくことにある。文化センターは、設立費用7000万円、鉄筋コンクリート二階建てで、元の給食センターを改築したものである。町立博物館的な内容で、「沖縄戦」、「移民」、「民俗」、「芸能」の四つのテーマから構成されている。「沖縄戦」のコーナーは、南風原陸軍病院の壕内を、生き残りの従軍看護婦らの証言に基づいて再現した、常設展示室が目玉である。

展示とあわせて、文化センターが設立される以前から行われていた、町史編纂事業「南風原が語る沖縄戦」も精力的に取り組まれている。同町史の沖縄戦関連の編纂事業の特徴は、1984年の「喜屋武が語る沖縄戦」を皮切りに、編纂が進められた集落（字）ごとの町史である。1996年に13の集落全部の沖縄戦記録を出版した。その他、戦時中に本土に疎開した学童たちの、当時の疎開地での体験や疎開にたいきさつなどをまとめた「もうひとつの沖縄戦南風原の学童疎開」（1991年）、「検証・6・23障害者の沖縄戦」（1994年）などを発刊した。身近なところから沖縄戦を考え、南風原という町にとって沖縄戦とは何だったのか、どのような影響を与えたのかを問い続けてきた。

沖縄戦だけでなく、戦前の南米移民者の生涯を町民が演じる、「イッパチの夢をかける」の制作上映（1990年）や、「南風原の今、むかし」（同）、「帰ってきたむかし沖縄写真展」（1991年）、「Aサインからポーク缶詰まで」（1994年）など、民俗文化、伝統産業、戦後の暮らしをテーマにした展示会や講演会も数多く開催している。

2004年は、「第11回はえばる町子ども平和学習交流」と題して、南風原町内の小学校の6年生14人が、疎開体験者9人とともに、疎開地であった熊本、宮崎を訪ねた。沖縄戦の前年の1944年、南風原町からは200人あまりが学童疎開した。平和事業の参加者らは、一行44人で、南風原からの疎開を受け入れた熊本県や宮崎県の受け入れ側の学校を訪問したり、当時児童らと交流のあった人々を訪ねた。

参加した子どもたちは研修終了後、「私は研修の夜、家や家族とあまりはなれたことがなかったので家族がこいしくてかわからないけど泣いてしまいました。そしたら次子さんが、『疎開した人たちは2年、3年家族とはなれていたから、理沙は疎開した人たちと同じ心もっているかもね』とはげまされたりしました。私はこれからも、この経験を生かし、頑張っていきたいと思います¹²⁵」、「日奈久小学校の校長先生が語った『戦争をおこさないでほしいではなく、戦争はおこしてはいけない』という言葉が、私の胸に強く残りました。¹²⁶」などの感想を寄せている。

2) 読谷村

読谷村は、沖縄本島の中部西海岸に面し、国道58号線に位置する。那覇から28kmのところであり、

¹²⁵ 南風原文化センター（2004） p. 23

¹²⁶ ibid. p. 34

文化財、史跡、名勝、遺跡なども多い。沖縄戦で米軍の上陸地点となったところで、空と海からの猛爆により焦土と化し、戦後の一時期は村域のほとんどが米軍基地として接收されるなど苦難の時代を送った。村面積3,517㌥の内1,649㌥、45%を米軍基地が占め、「村づくりの大きな障害になっている」として、米軍基地として使用されている土地の返還を求める声が村では強い。「恒久平和」、「自主自立」、「共生持続」を基本理念とする、人口3万8千人あまりの村である。1982年に「非核宣言」、1988年第一回平和創造展開催、1991年に平和行政の基本に関する条例制定、1995年不戦宣言を村議会で決議するなど、平和行政への取り組みが熱心な村である。

特に不戦決議は、県内市町村でもあまり例がない。「人類の未来は常に明るいものでなければならない。それは全ての人類の共存、共生、協調の時代、核の脅威からの解放は人間性の解放につながり、大自然と調和する人間の営みは、明日への活力を生む」で始まる不戦の誓いは、沖縄戦終戦50年を機に行われたものである。不戦の「沖縄の心」を強調し、「武器なき社会」の実現と、あらためて「恒久の平和を願い不戦を誓う」とうたっている。

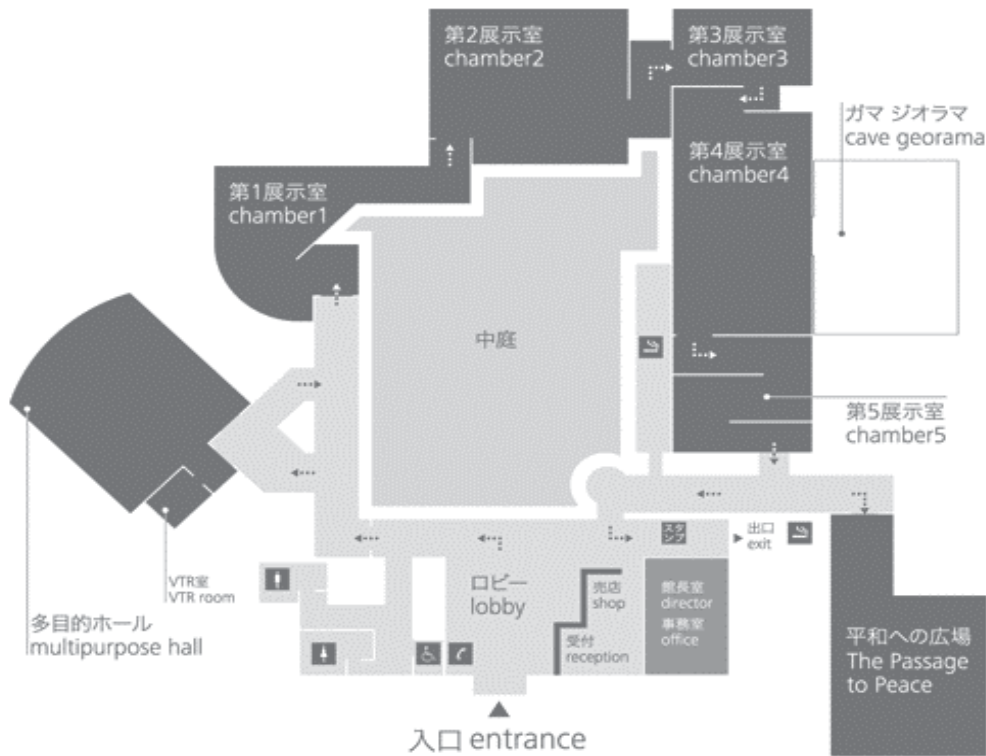
2-3-3 市民団体の取り組み

(1) ひめゆり平和祈念資料館

「ひめゆり看護部隊」で知られる女子学徒隊に関する資料館。1989年に建設された。沖縄戦時、沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女学校の女子生徒15歳～19歳までの222人は、引率教諭18人とともに看護要員として動員され、生徒123人、教諭13人が犠牲となった。これらの犠牲者の鎮魂と平和への願いを込めて、ひめゆり部隊の同窓生らが建設したのが同資料館である。犠牲者を合祀する「ひめゆりの塔」と同じ敷地内にある。

資料館は一階建て。敷地面積11,667平方㌥で、資料館は中庭の花畑を囲むように作られている。第一展示室が「ひめゆりの青春」。ここは、2004年の改築前までは、「沖縄戦前夜」とのテーマで、平和な学園に急速に戦争の影が落ち、戦場へ動員されていく過程を描いている。第二展示室は、動員された生徒たちが配置された南風原の沖縄陸軍病院の病院壕での様子をジオラマと生存者の証言によって描く。ありの巣のように張り巡らされた横穴の壕に二段ベッドが置かれただけの施設で、生徒たちは必死の看護をした。第三展示室「解散命令と死の彷徨」は、米軍が間近にせまった1945年6月18日夜、「解散命令」が出され、生徒たちは米軍の包囲する戦場に放り出された。このことがひめゆりの少女たちの犠牲を大きくした。「解散命令」後の数日間で、100余名の学徒が死亡した。この時の悲劇を、米軍のフィルムと生存者の証言で伝える。第四展示室は「鎮魂」と題され、壁面にはかけられた200余名の犠牲者の遺影と、生存者の証言本が展示されている。また、ガス弾攻撃によって多くの犠牲者がでた伊原第三外科壕（ひめゆりの塔）が実物大で再現されている。

図2-3 ひめゆり平和祈念資料館 館内レイアウト



出所：ひめゆり平和祈念資料館（2005）

「ひめゆり」の名前が全国に知られるようになったのは、1951年に書かれた小説「ひめゆりの塔」（石野怪一郎著）以降のことである。同年には、ひめゆりの女子看護学生たちを引率した教諭の一人仲宗根政善による「沖縄の悲劇 - ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」が出版された。1953年には映画「ひめゆりの塔」が上映され、空前の大ヒットとなった。全国的には戦後の混乱が落ち着き始めた頃で、ひめゆりの塔をはじめ、南部戦跡を訪れる本土からの参拝者が増加していった。ひめゆり学徒隊の犠牲者を合祀するために1946年に建立されたひめゆりの塔は、1957年に現在の碑に建て直された。

資料館建設以前から、ひめゆりの塔への参拝者が多かったし、映画や書物などでよく知られていたことも手伝って、開館以来、毎年80万人から90万人の参観者が訪れ、開館から15年で1,000万人を超えるなど、平和学習の場としては全国的に知られた資料館となっている。

ひめゆり祈念資料館は1990年に平和教育への貢献が認められ、沖縄タイムス文化賞を受賞、1992年にも「戦争と教育という観点から遺品とジオラマで展示したこと」が評価され、菊池寛賞を受賞した。1996年に発行された国連の「世界平和博物館」にも同館が掲載されている。

(2) 対馬丸記念館

学童疎開船対馬丸が、米潜水艦に撃沈された60年目の、2004年8月22日、「対馬丸記念館」が那覇市若狭の旭ヶ丘公園内に開館した。敷地面積約930平方メートルの中に、延べ床面積約769平方メートルの地上2階と屋上を設けた記念館で、対馬丸の慰霊碑・小桜の塔と同じ旭ヶ丘公園内に立地している。

対馬丸は、1944年8月21日、学童や引率教員、一般疎開の人々をのせて那覇港を出発したが、翌22日の午後10時ごろ鹿児島県トカラ列島悪石島沖で、米潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没した。乗船者の多くは船倉に取り残され、また海に飛び込んだ者も、高波にのまれて亡くなった。犠牲者の数は、学童775人を含む1418人だった。戦時中は、軍事機密として公にされなかったが、1950年に遺族会が結成され、1954年に犠牲者を祭る小桜の塔が建てられ、毎年8月22日に慰霊祭を行ってきた。2階の常設展示室では、対馬丸の出港から撃沈、漂流、救助までをパネルで展示している。

1階展示室では、船倉ベッドや犠牲になった疎开学童の遺品、遺影のほか当時の教室の再現、タッチパネルと音声による生存者、遺族の証言、また、犠牲者の氏名を記したボードなどを展示している。展示品の合計は遺影が101点（116人分）、遺品が23点（14人分）展示されている。

犠牲者の鎮魂や遺族の思いを伝えるだけの慰霊施設ではなく、「対馬丸の子どもたち」と「今を生きる子どもたち」がこの空間で出会い、語り合い、未来へと継承し続けることこそが、同記念館の目的とするところである¹²⁷と、関係者は語っている。

③ 1フィート運動の会

正式な名称は「子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会」と言い、通称「沖縄戦記録フィルム1フィート運動の会」と呼ばれる。同会は、1983年に学者や文化人らが中心になって、結成した。米軍が撮影した沖縄戦の未公開フィルムを、県民の募金で買い集め、子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝えるというのが趣旨。米国の国立公文書館には、空軍関係の沖縄戦に関するフィルムが約100本保管されているほか、海兵隊や海軍関係のフィルムは数千本に上るといふ。フィルムは1フィート（約30.5cm）で100円。一本が7万円¹²⁸だった。募金運動は大きな反響を呼び、延べ人数にして、1万人が会員登録をし、翌年の1984年4月までに7百万円あまりの募金が寄せられた。5月には注文した12本、9600フィートが到着し、上映会が行われた。これら入手フィルムの上映会は、6月に沖縄で初めて開かれた日教組大会、衆院外務委員会、参院沖縄北方特別委員会、沖縄県議会他でも上映会が開催され、大きな反響を呼んだ。

一年あまりの間に三千万円あまりの寄付が寄せられ、同運動の会は44本、約3万フィートのフィルムを購入し、5万人あまりが上映会に参加した。米国から購入したフィルムを中心に戦後の沖縄も織り込んだ、50分の映画「沖縄・未来への証言」が自主制作され、ペルー、ベトナムなどでも上映され反響を呼んだ。「未来への証言」が、優秀映画あるいは推奨映画として各界から評価を受け、1995年にはその第二弾「ドキュメント沖縄戦」（55分、カラー）が制作された。

2003年までに、これらのドキュメントフィルムの上映会の開催は120回をこえ、上映会への参加者が1万2千人をこえた。上映会の開催他、ビデオの販売、平和学習の場への講師の派遣も2万回を超えるなど、活動は各界から評価され注目を集めている。

その他の平和関連の民間施設としては、宜野湾市の佐喜眞(さきま)美術館がある。美術を通して平和を訴えるという、ユニークな施設であり、1994年に開館した。「人間と戦争」がテーマの私設の美術館

¹²⁷ 沖縄タイムス 2004年8月21日 朝刊オピニオン5面

¹²⁸ 沖縄タイムス 1983年10月25日

で、1995年に国連が出版した『世界の平和博物館』にも収録されている。緑の多い米軍普天間基地に、食い込むようにして建つ一階建ての建物。「原爆の図」、「南京大虐殺の図」、「アウシュビッツの図」など、いずれも戦争の悲惨さと人間の行為の愚かしさを厳しく追及する大作で、有名な丸木位里・丸木俊夫妻が1984年に完成させた「沖縄戦の図」も常設展示されている。

その他、原爆を描き続けた上野誠や、アウシュビッツの獄中で監視の目を盗んで制作された、版画「農民戦争」のシリーズを手がけたドイツの女性画家、ケーテコルビッツ、そして人間の内面にまで踏み込んで表現主義的な描写を試みたフランスの画家ジョルジョ・ルオーなどの作品コレクションを持つ。これらに共通するのは、「生と死」、「苦悩と救済」、「人間と戦争」などである。

米軍基地内にあった土地を返還させて建設したこと、沖縄の独特な亀甲墓が近くにあることなど美術館の場所、建設のコンセプト、すべてに「平和への祈りの継承」という意図を込め、佐喜眞道夫館長がこだわって建設した美術館である¹²⁹。

沖縄県教育委員会は1994年に「平和教育関連施設マップ」をまとめているが、その中で主な施設だけでも50あまり、その他にも沖縄には多くの平和学習の場所がある。特に沖縄戦関連では、各県の慰霊碑が南部に建立されているし、住民が避難したガマ（自然壕）なども平和教育の場として現在よく利用されている。

おわりに：沖縄から伝える平和への想い

沖縄には命の尊さ、人々の和、やさしさを表すことばがいくつもある。「命どう宝（ぬちどうたから：命こそ大切）」という言葉は、命の大事さをいった言葉である。「ゆいまーる」とは、親族あるいは地縁関係のある一同でお互いの労働力を提供しあった昔の慣行から、広い意味で相互扶助を意味する。「いちやりばちょうでー」ということわざは、一度出会えば兄弟と同じことという意味で沖縄の人々の人情を表す言葉といえる。その他にも、たとえば「ちむぐくる」とは深い心情を表し、「ちむじゅらさん」は心がきれいなこと、「ちむぐりさん」は不憫な、かわいそうなという意味を表す。

これらの言葉は沖縄の歴史や風土が生み出したものである。争いを好まず、人との和を大事にし、小さいものや弱いものをいたわる。沖縄は、戦争や外国の支配など、外から押し寄せた大きな権力に、揺れ動かされた歴史があるが、そのような辛い体験を経て、学んだのは「命こそ宝」、「平和」、「共生」という、昔から沖縄に伝えられてきたもの大切さであった。

第一回の沖縄平和賞受賞者の中村哲は、「平和を唱えることさえ暴力的制裁を受ける厳しい現地の状況の中で、その奪われた平和の声を『基地の島・オキナワ』の人々が代弁するのは、現地に居る日本人として名誉であります」と語り、第二回受賞者のAMD Aの菅波理事長は「沖縄は日本で唯一の血縁共同体社会である」とし、世界中で、支援を必要としている人たちは、この血縁共同体の社会に生きている人々であることを指摘し、「私たちが沖縄の人たちに期待するのは、血縁共同体社会でもう一度世界を見直していくということです」と語った。いずれも沖縄から贈られた平和賞に特別の感慨を込め、沖縄が世界に平和を叫ぶことの意義を指摘している。

¹²⁹ http://sakima.art.museum/about/concept_b.html

世界中で戦争や民族間の紛争が耐えない現代、平和という言葉は、政治的場面でいろいろな使われ方をする。敵対する双方が平和のための戦争を主張することも多い。このような、複雑な世界情勢で、沖縄から可能な平和貢献があるとすれば、それは、名も無い普通の人々の歴史と体験を伝え、古くから歴史の中で培われた、命の大切さ、心の優しさ、人の和を大事にする沖縄の心を説き続けることと言える。

参考文献

- 青い海出版 (1977) 『沖縄の郷土月刊誌 青い海 No.64 1977年7月号』
- 東江平之著 (1991) 『沖縄人の意識構造』 沖縄タイムス選書
- 糸満市立三和中学校編 (1996) 『三和地区の慰霊塔・碑・ガマ ここは戦場だった』 糸満市立三和中学校
- 沖教組教育研究所平和教育研究部会 (2002) 『沖縄学校平和劇 脚本集』 沖教組教育研究所
- 沖縄県教育委員会 (1993) 『平和教育指導の手引き』 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会編 (1994) 『平和教育関連施設マップ』 沖縄県教育委員会
- (1995) 『平和教育指導資料集』 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育文化資料センター (1996) 『沖縄戦とガマ』 沖縄県高等学校・障害児学校教職員組合教職員組合
- 平和教育研究委員会編 (1988) 『オキナワ・平和への 実践 - 学校から、地域から - 』 沖縄県教育文化資料センター・平和教育委員会
- 沖縄教職員会 (1955) 『沖縄教育 第二号 第一回全沖縄教育研究大会研究集録 = その4 環境の問題』 『沖縄教育 その5 環境の問題』 沖縄教職員会
- (1957) 『第一集 沖縄教育 第三次教研集会報告』 沖縄教職員会
- (1960) 『沖縄教育第 10号 特集号』 沖縄教職員会
- (1969) 『国民教育資料』 沖縄教職員会
- 沖縄県教職員会教育文化部編 (1969) 『第16次教研集会報告書 (国民教育)』 沖縄県教職委員会
- 沖縄県教職員組合 (1978) 『沖縄の平和教育 - 特設授業を中心とした実践例』 沖縄県教職員組合
- (1982) 『平和教育 - 教科や教科外で平和教育をどうとらえ、どう実践するか 沖教組第29次中央教研討議資料』 沖縄県教職員組合
- (1983) 『沖縄教育 沖教組第29次教研集会集録』 沖縄県教職員組合
- 沖縄県教職員組合編 (1978) 『沖縄教育 第25次教研集会集録』 沖縄県教職員組合
- (1985) 『沖縄教育 第32次教研集会集録』 沖縄県教職員組合
- (1993) 『沖縄教育 沖教組第40次教研集会集録』 沖縄県教職員組合
- 沖縄県高等学校・障害児学校教職員組合平和教育委員会編 (1990) 『中央教研 平和教育分科会集録 ~ 国民教育 平和教育分科会の流れ』 沖縄県高等学校・障害児学校教職員組合平和教育委員会
- 沖縄県広報課 (2004) 『美ら島沖縄 12月号 Vol.351』 沖縄県広報課
- 沖縄県総務部知事公室平和推進課編 『平成15年度版 業務概要 = 平和の創造と発信』 沖縄県総務部知事

公室平和推進課

沖縄県地域誌協議会編 (2004) 『沖縄県地域誌協議会会誌27号』 沖縄県地域誌協議会

沖縄県平和祈念資料館 (2005) “ 沖縄県平和祈念資料館 ” ウェブサイト :

<http://www.peace-museum.pref.okinawa.jp/> アクセス日 : 2005年3月

---- (2004) 『児童・生徒の平和メッセージ展実施報告書』 沖縄県平和祈念資料館

---- (2001) 『総合案内』 沖縄県平和祈念資料館

沖縄タイムス社編 (1950) 『鉄の暴風』 沖縄タイムス社

---- (1970) 『1970年 沖縄年鑑 戦後25年総合板』 沖縄タイムス社

---- (1983) 『沖縄大百科事典 (上) (中) (下)』 沖縄タイムス社

沖縄平和協力センター (2004) 『沖縄の戦後復興プロセスの体系的整理調査報告書』 沖縄平和協力センター

沖縄返還同盟編 (1969) 『沖縄問題入門』 新日本新書

勝連町教育委員会編 (1995) 『副読本 平和教育』 勝連町

子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会編 (1993) 『一フィート運動十周年記念誌』 子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会

---- (1998) 『一フィート運動のあゆみ 集録1994年～1998年』

財団法人沖縄女子師範・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念館編 (2004) 『ひめゆり平和祈念資料館 開館とその後の歩み -』 財団法人沖縄女子師範・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念館

---- (2004) 『ひめゆり平和祈念資料館会報第15号』 財団法人沖縄女子師範・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念館

財団法人南西地域産業活性化センター平成14年度自主研究事業 (2003) 『沖縄県における地域歴史書刊行事業の成果とその意義』 (財) 南西地域産業活性化センター

早乙女愛・足立力也著 (2002) 『平和をつくる教育 軍隊を捨てた国コスタリカの子どもたち』 岩波ブックレットNo.575 岩波書店

週刊朝日出版部 (1991) 『ザ・闘論 戦争をどう教えるか』 教育資料出版会

北谷町史編集局事務局 『北谷町民の戦時体験記録集第一集』 北谷町

Toss沖縄教育サークル著 (2000) 『沖縄から平和学習へのメッセージ』 明治図書

名嘉正八郎・谷川健一編 『沖縄の証言 (上) (下)』 中公新書

仲程昌徳著 (1982) 『沖縄の戦記』 朝日選書

名護市史編纂室編 (1985) 『語りつく戦争 市民の戦時・戦後体験記録』 名護市

ニライ社 (1996) 『代理署名裁判 沖縄知事証言 基地のない平和な島へ』 ニライ社

南風原文化センター編 (2000) 『クサティの森 足元から世界へ、世界から足元へ』 南風原文化センター

---- (1999) 『南風原が語る沖縄戦 南風原町史第3巻 戦争編ダイジェスト版』 南風原文化センター

---- (2004) 『あしあと 第11回南風原町子ども平和学習交流事業』 南風原文化センター

比嘉幹郎著 (1965) 『沖縄 政治と政党』 中公新書

ひめゆり平和祈念資料館 (2005) “ ひめゆり平和祈念資料館 ” ウェブサイト :

<http://www.himeyuri.or.jp/index2.html> アクセス日：2005年3月

宮良ルリ著 (1986) 『私のひめゆり戦記』 ニライ社

琉球新報社 (1997) 『沖縄へのメッセージ』 琉球新報社